

平成19年度外部評価委員会報告（和訳）

2008年2月10日現在

外部評価委員会のメンバーは、2008年1月15日に国際教養大学を訪問し、その間、大学執行部等とじっくりかつ率直に話し合うことができた。そこで、当大学が4年前に開学以来、立派な実績を数多く成し遂げていることを納得することができた。われわれがもっとも感銘したことは、AIUが意欲的な使命を達成するため、中期計画、年次計画を確実に遂行し続けることができるよう、すべての教員・職員が一心に努力していることを確認した。

以下に述べることは、評価結果をまとめるための会合での議論を要約したものである。そのなかには、いくつかの小さな問題点があるものの、われわれは、それらが今後のAIUの発展を妨げるものではなく、全般的にはこれまでの業績を打ち消すものではないことを強調しておきたい。また、AIUの大学運営に係る業績は高く評価されるべきものであり、日本の教育界に新たな礎を築くものとなろう。

（1）大学の理念と教育組織体制

・大学の理念・目的が教職員・学生及び県民などに広く周知・理解されているか

大学の使命は明確に示されているが、事務局職員（特に県から出向している職員）が頻繁に変わるので、大学の使命を繰り返し強調する必要がある。理念も独自のものであり、地域社会に徐々に受け入れられつつあるが、これからも常に訴え続ける必要がある。新聞でも多く取り上げられることが効果的である。

県への働きかけに多くの努力がなされているが、地元の行政機関以外に対しても貢献できる部分があるはずである。AIUがどのくらい貢献しているのかを知らない県民があまりにも多い。しかしAIUの学生が地域社会と交流を行っている例はたくさんある。

委員会では、AIUの使命に関わる3つの要素（「我が国をリードする教養教育環境の構築・維持」「教育・研究の質の卓越性の確保」「大学の有する知財による地域・社会への貢献」）に一貫性があるかどうかについて話し合った。一つの使命に向けての努力が、他の要素と相反することにならないか、という懸念が出された。ある段階で、AIUは核となる3つの使命を再考し、AIUが実際に進んでいる方向をより正確に、簡潔に表すことができるのではないかという発言もあった。

・教育研究上の組織が大学の理念・目的に照らして適切に構成・運営されているか

県からAIUへ出向を命じられている職員は、AIUでの勤務を「別の一時的な仕事」と考

えているのか、それとも AIU の使命に打ち込むことができるかどうかを基準で選ばれているか、という疑問が出された。いったん AIU での仕事を始めると、学長が AIU のユニークさを繰り返し述べるので、ミッションを明確に受けとめることが多いのではないかと感じた。

アメリカやイギリスの大学では、教員は自分たちの教育研究に関する自主・自律性を守ろうとするが、どちらかと言うと、AIU の教員は上層部が求めるような教育研究を余儀なくされている。AIU の最も重要な資源である教員と職員が最大限に活かされるという目標を達成する上で、中嶋学長の柔軟なリーダーシップが極めて重要となる。

(2) 語学教育の内容及び方法

・語学教育に関するふさわしい授業形態、指導方法等が効果的に実践されているか

少人数グループに言語を教える形式は今後も継続してほしい。すべての EAP (英語集中プログラム) 及び日本語担当の教員が博士号を有するべきか、という疑問が残る。教授法の修士号を持った者でも、指導できることが多いのではないかと感じた。

(3) 教養教育

・教養教育に関する十分なカリキュラムや指導体制が整備・実践されているか

2008 年度から改訂される新しいカリキュラムは、外部評価委員会が指摘した多くの問題点に対処しているように思える。職業、スキルを基盤としたモデルから、教養、理論を重視するアプローチへ移行したことは、国際社会で競い、地域と国際社会に積極的に貢献できる人間を育てるという AIU の目標に適していると思う。今までのシステムを別のシステムに転換することは容易ではない。が、この点は慎重になされているように思える。提携校に AIU の教養教育のカリキュラムの幅の広さを納得させるために一層の努力が必要となろう。カリキュラムの構成に、今まで以上にアカデミックな要素が加わったことがわかる。学生が海外留学による単位互換を可能にする面でかなりの進歩が見られる。また、海外から戻る学生からの意見にも積極的に耳を傾けている。これは今後留学する学生たちにとり有益な情報源となりうる。

(4) 専門教育

・専門教育に関する十分なカリキュラムや指導体制が整備・実践されているか

増加する学生数に対応するカリキュラムが構築されている。全学年に対処する十分な内容となっている。新設される専門職大学院は、日本における特定のニッチ (市場) に向けられているように思える。AIU の大学院は、そのニッチ・マーケット (市場の隙間) にと

り非常に魅力的なものになると確信している。内容も特定の分野において求められるものとなっている。しかし、学生を確保するためには、一層の努力が必要である。英語と日本語を教えるために必要とされる様々なライセンス（教職免許）にどのように結びつけるか、という点を明確にする必要がある。

(5) 学生支援体制

・学生に対する履修指導や学生の生活面・経済面・心理面における相談・助言・支援が適切に行われているか

AIU は小規模であるから、学生の個人的問題への対処やカウンセリング面で有利である。学生が抱える心身の問題へのケアも個別的になされ、一人ひとりのニーズも配慮されている。特に海外から戻る学生が増えるにつれ、今後はピア・メンターなどを設けることが必要となる。第1期生がまもなく卒業することを考えると、同窓生に関するデータベースとネットワークを充実させることに、いままで以上の配慮が必要となる。

なお、留学生は、地域社会との関わりをより多くもつことにより得るものが大きいと感じた。

(6) 大学施設・設備と教育環境

・学生の各種活動や自主的学習を支援する設備・環境が整備され機能しているか

新しい図書館設備は歓迎すべきであるが、研究に求められている研究誌やデータベースが今まで以上に利用できるようにする必要がある。特に、JSTOR では、インターネットを通して、広範囲にわたる研究誌にアクセスすることができる。

なお、授業を見学した教室には常設の AV 設備がなかったことが指摘された。

(7) 大学の管理運営体制と法人制度

・教員の教育研究活動や職員の業務遂行を支援する体制や組織が整備され機能しているか

昨年、外部評価委員会が提言したことのいくつかが実行されていることに満足している。「2007/08 年度教員評価」では、研究活動への言及がなされていなかったもので、活発な研究を行う動機が減少したと思われる。特に、大学院が間もなく始まることを考えると、教育と研究との連携を明確にする必要がある。

留学、健康、利便性などの支援に関する学生満足度調査における特定の項目で結果が 50% 以下であったことに懸念を抱いた。次回の外部評価委員会において、そのような学生評価に対し AIU がどのように対処しているのか詳しく聞いてみたい。